

研究結果報告書

研究結果

本研究は、植民地期の韓国済州島において、日本人企業家が、どのような個人的背景から生まれてきたのか、さらには、どのような社会的動機・背景から済州道に進出し、企業家活動を遂行してきたのかを明らかにしようとしたものである。本研究では、『個人履歴書』に掲載された日本人企業家の経営活動及びその社会的背景を理解し、把握するために、詳細な文献調査、現地調査を行った。本研究の結果の要約は、以下のとおりである。

□第一に、日本人企業家は明治期(1870 年代-1890 年代)生まれの人が多く、出身地は、ほぼ全国(青森、宮城、東京、茨城、埼玉、千葉、長野、石川、富山、福井、神戸、京都、和歌山、兵庫、佐賀、岡山、広島、福岡、大分、鹿児島など)にわたっている。

□第二に、日本人企業家の学歴をみると、明治期には、低学歴者(講習所、専門学校、商業学校、高等工業学校などを卒業)が多くみられるが、家庭状況・経済状況の変化からか、それ以降は、高等教育(東京帝国大学など)の卒業者も比較的高い比率を占めるようになってきている。

□第三に、日本人企業家の多くは、1920 年代から 1940 年代にかけて済州市、西帰浦、翰林、城山浦などの港口を中心に企業経営を行ってきた。彼らの多くは、戦争に必要な軍需物資の原料を生産し、供給する工場(会社)を設立したのである。

□第四に、日本人企業家の多くは、1920 年から 1940 年代の期間に数多く会社(工場)を設立したが、その企業形態の多くは「株式会社」であった。

□第五に、日本人企業家の多くは、済州島内の会社の経営権を盤石なものとするために、漁業、電気、流通、金融等の分野に積極的に進出し、資本規模の充実を図り、施設面でも独占的優位性を持つようになった。

□第六に、日本人企業家は、本人が直接、工場或いは会社を設立し、経営権を握って経営活動を行うケースが多いが、一方では、支配人、理事、監査役などの肩書き/立場で、経営に参加するケースも多く見られた。

□第七に、日本人企業家は①創業経営者②専門経営者③財閥経営者④家業継承者⑤官僚転職者といった企業家タイプに分類できるが、一方では、警察、政界、財界、行政、済州島司など官僚から転職する企業家も多かった。

これ以外にも、薩摩芋を原料とする酒精、酒造、澱粉工場、水産物を加工する缶詰工場、海藻のカジメ(搗布)を化学的に分解して医薬品の原料を抽出するヨード(沃度)工場などの製造工場を設立した日本人企業家もいた。

このように、済州島の日本人企業家の多くは、工場(会社)設立を通して資本蓄積を図り、それぞれ積極的な企業経営を行ってきた。結局、それは企業家タイプの違いによってそれぞれの企業家活動が異なるという事実を認識することができるであろう。

研究成果の公表について(予定も含む)

口頭発表（題名・発表者名・会議名・日時・場所等）予定

題名：植民地期の韓国済州島における日本人企業家の登場と社会的背景

発表者名：高 廣 明

会議名：済州学研究者会

日時：2012 年 11 月

場所：財団法人 済州考古学研究所 研究室

論文（題名・発表者名・論文掲載誌・掲載時期等）予定

題名：植民地期の韓国済州島における日本人企業家の社会的背景に関する研究

発表者名：高 廣 明

論文掲載誌：済州島研究(社団法人 済州学会)

掲載時期：2013年 2月 29日

ISSN：1229-7569

書籍（題名・著者名・出版社・発行時期等）完了

題名：植民地期の済州地域における日本人の会社(工場)設立と経営活動

著者名：高 廣 明

出版社：済州学研究者会(新亜出版社)

発行時期：2012年 3月 30日

ISBN：978-89-97074-17-4